

消化器癌に対するPD-1/PD-L1経路遮断抗体療法の奏功 機序解明並びに規定因子同定に関する検討

研究対象者の皆さまへ

本研究は当消化器・総合外科において1998年1月1日から2006年12月31日までに胃癌、大腸癌、肺癌、肝細胞癌、乳癌を切除した方各100例を対象に研究させていただきます。

対象者となることを拒否される方は、下記連絡先までご連絡ください。

【はじめに】

PD-1リガンドは、ヒトの様々な癌組織において発現しています。卵巣癌、悪性黒色腫、食道癌、腎細胞癌、膵臓癌および尿路上皮癌などの癌腫では、切除した癌組織におけるPD-1リガンドの発現と術後の生存期間との間に負の相関関係があることが報告されています。また、PD-L1を強制発現させた癌細胞株を用いた同系担癌モデルでは、抗PD-L1抗体の投与により、移植した癌細胞株の増殖が抑制されました。癌に対する腫瘍免疫応答に関わるPD-1及びPD-L1、PD-L2の相互作用と消化器癌進展との関連の明確化及びその免疫学的機序の解明は、臨床上、非常に重要と考えられます。

【目的】

各癌における腫瘍免疫応答にかかわる分子の発現を調査し、予後との関係の検討を行います。

【研究内容】

九州大学病院消化器・総合外科(第二外科)において切除された各癌の標本を使って、病理学的因子と予後を統計学的に検証し、予後に関わる因子を同定します。

PD-1、PD-L1、PD-L2を同定する染色を行い、これらのたんぱく質の出現の程度を測定します。

この染色の結果と患者さんの背景を比較し、PD-1やPD-L1、PD-L2の発現低下が果たして各癌においてどういった影響を持つのか考察します。

【研究期間】

研究を行う期間は平成26年3月31日までと考えています。

【医学上の貢献】

この研究により各癌における免疫応答抑制因子の発現と臨床病理学的因子および予後との関連が示唆されれば、新しい予後因子などが明らかとなり、医学上の貢献はあるものと考えます。

PD-1、PD-L1、PD-L2の
発現増加



腫瘍免疫応答の
低下

【個人情報の管理について】

個人情報漏洩を防ぐため、九州大学大学院医学研究院消化器・総合外科学分野においては、個人を特定できる情報を削除し、データのデジタル化、データファイルの暗号化などの厳格な対策を取り、第三者が個人情報を閲覧することができないようにしております。

また、本研究の実施過程及びその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

【研究機関】

研究責任者：九州大学大学院 消化器・総合外科 教授 前原 喜彦
研究分担者：九州大学病院 肝臓・脾臓・門脈・肝臓移植外科 診療准教授 調 憲
九州大学大学院 外科集学的治療学講座 准教授 吉住 朋晴
九州大学大学院 消化器・総合外科 特任講師 竹之山 光広
九州大学大学院 病理部 臨床助教 岡野 慎士
九州大学大学院 外科集学的治療学講座 共同研究員 梅本 雄一郎

連絡先：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1 九州大学病院 消化器・総合外科

外科集学的治療学講座 共同研究員 梅本 雄一郎

Tel 092-642-5466 Fax 092-642-5482